

## 11月4日 年間第31主日

知 11:22～12:2    Ⅱテサ 1:11～2:2    ルカ 19:1～10

### 1. ルカ

vv.9-10 「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われた者を捜して救うために来たのである。」

アブラハムの子とは、神から祝福の約束を受けた(創 12:1-3, 15:5-6)アブラハムの子孫、すなわちイスラエルのことであって、捕囚後の頃から通称ユダヤ人と呼ばれるようになった人々のことです。イエスは先ず、このイスラエルへの福音宣教を優先されたと、マタイ福音書は伝えています(10:5-7)。

初代教会の宣教に対して、ユダヤ人の多くがこれを歓迎せず、福音が異邦世界に宣べ伝えられるようになって(使 10-11 章,13:45-47)、その後キリスト教的西欧にはいわゆる“反ユダヤ主義”が根を下ろすようになりました。“キリスト殺しのユダヤ人”という偏見を放置し、ヒトラーによるホロコースト(ユダヤ人大虐殺)に至る歴史に対して、カトリック教会も決して無責ではなかったことへの反省が、第二バチカン公会議での“キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言”となったのでした。

ユダヤ人は、イエスを十字架につけると叫んだだけで(マコ 15:12-15)、彼らには死刑の判決を下す権限がありませんでした(ヨハ 18:31)。死刑を判決し、執行したのは、現代イタリア人の祖先であるローマ人でありました。しかし不思議なことに、“キリスト殺しのイタリア人”という偏見を私たちは聞いたことがありません。

多くの人々は、神の約束と契約が本来イスラエルのものであったこと、異邦人である私たちは後からそれに共に与る者となったという事実を知りません(ロマ 9:4-5、エフェ 2:11-13, 3:6)。キリストがその福音によって知らせてくださった「秘められた計画」(エフェ 1:9, 3:2-7)を、教会は久しく聖書から聞かずに歩んで来ました。上記の宣言が第二バチカン公会議で採択されたとき、なお“その討議の際に生じた緊張と意見の対立を残していた”と言われている事情\*の一端が、ここにあるように思われます。

\* G.アルベリーゴ／第二バチカン公会議 その今日的意味 p.206

### 2. Ⅱテサ

2:2 「主の日は既に来てしまったかのように言う……」

キリストの再臨と私たちの神の国への復活という主題は、福音の要であります。同時に現代人にとって最も理解し難いものであります。しかしそれは初めから、信仰によってしか受け入れることの出来ない主題でありました。当然、この主題をスキップしようとする人々が、初代教会にもいました(1コリ 15:12 参照)。

使徒たちが理解した教会とは、彼らが伝えた福音を信じた人々の共同体のことでした(1:10 参照)。その教会に使徒たちが繰り返し語ったことは、「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福

音の希望から離れてはなりません」(コロ1:23)でありました。

その福音の希望とは、異邦人がイエス・キリストへの信仰によって、キリストに結ばれて、「アブラハムの子」となり、同じ約束にあずかる者となったということです(ガラ3:15-29、ロマ4章)。この希望に生きるキリスト者に、主は「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから」と言ってくださいます。そしてこの福音の希望によって、“教会はキリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるしであり道具”(教会憲章1)となるのです。

### 3. 知

第二バチカン公会議が閉会して40年余になりますが、私たちが知っている日本のカトリック教会で、殆どの信者は自らその成果を学ぶ努力をせず、ただ受動的に外面的な変化だけを受け入れて来たように見えます。このため、福音と教会への、また典礼への無知と無理解によって、その果実に正しく与ることが出来ませんでした。

各地の小教区で、いろいろな委員や奉仕者として働いている信者でさえ、典礼憲章や教会憲章を読んだことがなく、聖歌隊に属する人やオルガニストでさえ“ミサ典礼書の総則”を学んでいないのが、今日の実状です。彼らは決して“無学な下層民”などではありません。新聞や雑誌を毎日読み、社会問題や政治問題に関しては立派に意見を言うことの出来る人たちなのです。

そのような日本のカトリック教会を、そこにいる私たち一人一人を、神は忍耐をもって見守っておられるに違いありません。神は私たちに、不可能なことを求めることはせず、ただ回心して立ち帰ることを、そして自らの能力に応じて“意識的、行動的に”、教会の歩みに参加することを期待しておられます。今朝の朗読配分から、そのような神の呼びかけを聞くことが出来る人は幸いです。

ハレルヤ、アーメン。

## 11月11日 年間第32主日

Ⅱマカ 7:1-2,9-14 Ⅱテサ 2:16~3:5 ルカ 20:27~38

### 1. ルカ

復活があることを否定するサドカイ派の人々は、この世の目に見える現実と“来るべき世”とを区別することを知りませんでした。キリスト者にとって、それは信仰によって“忍耐して待ち望む”(ロマ 8:23-25)ものであり、聖霊の保証によって“心強い”(Ⅱコリ 5:1-10)希望であります。教会は福音を通して、この世とは区別された“来るべき世”の希望に生きるようになりました(コロ 1:5)。

vv.35-36 「次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、……もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。」

キリスト教とは、地上に(この世に)神の国を実現する(造り上げる)ことを目標とする宗教だと考えている人は、“聖書も神の力も知らない”(マコ 12:24)のであって、そのような人にとっては“救い”も“信仰”も、単に自分が生きている間だけの精神的な“癒やし”でしかありません。そのような人には、キリストの再臨と神の国の到来を“忍耐して待ち望む”などということは、理解出来ないのです。

第二バチカン公会議の大きな貢献は、教会の“根元的な本質が、神のことばと主の食卓を囲み、地上を旅する神の民であることを再発見した”(アルベリーゴ)ことでありした。教会憲章は、神の国と教会を区別して次のように述べています。「教会は、神の国の地上における芽生えと開始となっている。」(5) 「その国は神自身によって地上に始められたが、…… ついには世の終わりに、我々の命であるキリストが現れるとき、神によって完成される。」(9)

教会は典礼暦の最後の三主日の朗読配分によって、この世には終わりがあるということを、そして教会は来るべき新しい天と新しい地とを待つ信仰によって歩んでいるということを、再確認するのです。

### 2. Ⅱテサ

テサロニケの教会の人々は“福音”によって、神の国でイエス・キリストの栄光にあずかるようにと選ばれ、招かれたのであり(2:13-14)、彼らには「永遠の(来るべき世の)慰めと確かな希望」(2:16)が与えられたと、使徒パウロは書いています。

しかしそれは、聖霊の力と信仰とによってのみ理解出来るものでした。コリントでもテサロニケでも、「すべての人に、信仰があるわけではない」(3:2)というのが事実でした。教会の外の世界では当然のことであっても、新しく誕生した初代教会の中では決してあってはならないことでした。「道に外れた悪人ども」(3:2)、「悪い者」(3:3)という強い表現の意図を、私たちは理解しなければなりません。同様にコリントの教会の人々に宛てた手紙の中でも、使徒パウロは書いています。「外部の人々は神がお裁きになります。あなたがたの中から悪い者を除き去りなさい。」(Ⅱコリ 5:13)



## 11月18日 年間第33主日

マラ 3:19～20a    IIテサ 3:7～12    ルカ 21:5～19

### 1. ルカ

vv.5-6 「ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。“あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。”」

イエスはエルサレムに建っていた当時のいわゆるヘロデの神殿に対して、汚名を着せようとされたのでしょうか。それは既に着工から50年近くが経ち、なお建設中でありました。紀元64年頃に完成した後、紀元70年にはローマ軍によって破壊されてしまったこの見事な神殿は、人類の歴史に記憶される価値のないものであったと、初代教会は後に考えるようになったのでしょうか。

現代人は地球の将来の運命について、大きな不安を感じています。人類が地球上に生息出来る時代に終わりが来るかも知れないという危機感が、人々の間に拡がりつつあるのです。地球温暖化の問題も、核兵器とテロの脅威に関しても、そのような目で人々が見るようになって来ました。これらは、イエスが語られた終末の予告と何か関係があるのでしょうか。

ブルトマンが新約聖書の非神話化と称して、聖書の使信を当時の古い世界観から解放するという考え方を提唱したことは、今も新約学における重要な課題と理解されています。それは、多くの人々がもはや使徒たちが宣教した“キリストの再臨と神の国の到来”という終末に関する使信を、そのまま信じることが出来ないという実状を正当化する試みだからです。“理解出来ないことを、現代風に解釈し直す”という読み方は、神学者だけではなくて一般信徒の多くも、皆やってみた経験があることです。しかしそれによって、現代の教会は“使徒たちが宣教した本来の福音”を再び聞くことに成功したのでしょうか。

### 2. ルカ

新約聖書が伝える終末とは、今の時代が断絶する日、私たちが見ているこの世界の“一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日”の到来のことです。それは、地球や地上に人間が生息出来る環境に寿命が訪れるというようなものではありません。そうではなくて、それはキリストの再臨によって引き起こされることであり(21:25-28)、“新しい世である神の国”が“今の世”と入れ替わるのです。

その日に神の国に復活出来るように、「忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい」(v.19)とされています。使徒パウロはより明確に、「信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい」と語りました(IIテモ 6:12)。この福音の希望(コロ 1:5、1:23)を証しする(v.13)信仰を、最後まで持ち続ける人々のために、vv.13-19は書かれています。

神は聖書を通し、御子の死と復活の出来事を通して、現代の私たちに語り続けておられます。この神のことは、すなわちキリストの福音に聞くということは、私たちが理解出来る出来ないに拘わらず、教会の命

であり信仰生活の糧なのです。私たち信者にとって主日のミサが、“神のことばの食卓の富に豊かに与る”(典礼憲章51)ものとなりますように。「それは、初めから終わりまで信仰を通して実現される」(ロマ1:17)ことだからです。

### 3. II テサ

v.11 「……余計なことをしている……」

かつての古き時代と異なって、現代人はカトリック教会に対しても自由に批判するようになりました。多くの人々が“バチカン時代遅れ”と言い、現代の実社会に合った教義上の方向転換を求める声が、全世界のカトリック教徒の間でも日増しに強まっています。それに対してバチカンは、その足下にあるイタリアの政治には政教分離の原則を無視してでも、カトリックの倫理観に従うことを求めて介入を繰り返しています。

それらは確かに事実の一部ではあります。しかし、教会離れが進む欧州と危機感を強めるバチカンという図式で描かれるジャーナリズムの報道からは、教会が使徒継承によって受け継いで来た“福音の希望”すなわち“神の国の福音”の宣教という、最も大切にしている働きが全く無視されています。そしてそのことを気に掛けるカトリック信者は、決して多くはないのです。

### 4. マラ

v.19 「見よ、その日が来る。炉のように燃える日が。」

v.20 「しかし、わが名を恐れ敬うあなたたちには、義の太陽が昇る。」

「信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい」と語る使徒の呼びかけを聞くことは、典礼暦最後の三主日のミサをささげる私たちにとって最大の課題です。第一に大切なことを忘れて、余計なことをしている怠惰な生活から、主が私たちに憐れんで引き上げてくださいますように。

ハレルヤ、アーメン。

# 11月25日 王であるキリスト

サム下 5:1～3 コロ 1:12～20 ルカ 23:35～43

## 1. ルカ

vv.39-42 「十字架にかけられていた犯罪人の……もう一人の方が……“イエスよ、あなたの御国においてになるとときには、わたしを思い出してください”と言った。」

イエスの処刑の場を通りかかった人々は、代わる代わるののしり、あざ笑って、“お前がメシア、ユダヤ人の王なら、十字架から降りて自分を救うがよい”と言いました。一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしりました(マタ 27:32-44、マコ 15:25-32)。

ルカ福音書が書かれた頃、すでに多くの人々がキリストの福音を信じるようになり、神の国の希望に生きる教会を形成していました。初期の受難物語りに描かれている民衆や兵士や犯罪人たちのイエスに対する侮辱の言葉に、他ならぬ自分自身の罪の姿を見出し、その罪のために神の子イエスが十字架の死によって、永遠の贖いを成し遂げてくださったと信じるようになっていました。ルカ福音書の受難物語りには、そのような初代教会の信仰が反映されているのです。

まだ自分の罪を知らず、キリストの福音を受け入れていない当時の人々に向けられた「お前は神をも恐れないのか」(v.40)という呼びかけが、現代のキリスト者である私たちに今朝再び語られています。

“王であるキリストの祭日”と呼ばれる典礼暦の最後の主日は、私たちが“キリストの出現とその御国とを思う”(II テモ 4:1)べき日ではありますが、我が国のカトリック教会でこの日にそのような説教が語られることは、これまでであったのでしょうか。しかし、この主日の“ことばの典礼”における朗読配分は、長い歴史を超えて今日に至るまで、この主題を明確に伝え続けて来ました。

## 2. サム下

ダビデ王はヘブロンで、イスラエル 12 部族の王となりました。それまではユダの家という一部族の王であった彼が、今やそのカリスマのゆえにイスラエルの全部族に受け入れられることとなったのです。そこで彼は、北と南のちょうど中間に位置し、これまでどの部族のものでもなかったエルサレムを攻略して(5:6-7)、イスラエルの新しい都にしました。彼はこれを彼の私兵(サム上 22:1-2, 27:2)によって陥れ、どの部族にも属さない“ダビデの町”としました(5:9)。

これまでは 12 部族のゆるい連合体でしかなかったイスラエルが、一つのダビデ王国になったという歴史の記憶は、後の時代のメシア王国の期待へとつながって行きます。カトリック教会が“主の降誕の祭日の夜半のミサ”で朗読する イザ 9:1-6 は、この期待がイエス・キリストへの信仰と固く結びついていることを、現代の私たちに示しています。

イエスが受難のためにエルサレムに入られたときの群衆の叫びを、マタイは「ダビデの子にホサナ」と

書き(21:9)、マルコは「我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように」と述べました(11:10)。かつてイエスの受難の出来事を、他人事のようにしか考えなかった私たち異邦人が、悔い改めて神を畏れる者となり、今やユダヤ人と共に神の国を受け継ぐという希望に生きるようになったのです(エフェ3:6)。歴史上のダビデ王国がそのまま神の国であったわけではありませんが、それは今なお、イエス・キリストの再臨によって実現する来るべき神の国を指し示すものであり続けています。

イスラエルのどの部族にもよらずに“ダビデの町”がイスラエル統一の中心となったように、来るべき神の国も人間のどのような集団やその計画によってでもなくて、再臨のイエス・キリストと共に出現することでしょう。教会は今はまだ目に見えないものを、信じて望んでいるのなら、私たちはその実現を忍耐して待ち望むのです(ロマ8:25)。

### 3. コロ

v.14 「わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。」

御子の贖いの血によって天の父と和解させていただいた者たちの教会は、“罪の赦しを得ている”ことをいつも感謝しましょう。イエスの処刑の場を通りかかって侮辱した民衆の罪、一緒に十字架につけられながら同じようにイエスをののしった強盗たちの罪が、まさに私たち自身の罪であったと気づくようになり、神を畏れる者となって悔い改め、“罪の赦しを得た”ことを、感謝しましょう。

「ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。」(1:23) 教会の典礼暦の最後の主日である今日は、神の国の王であるキリストの祭日です。

ハレルヤ、アーメン。